だから彼女はついてくる！

今宮いたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だから彼女はついてくる！

【Ｎコード】
Ｎ０６０３Ｘ

【作者名】
今宮いたる

【あらすじ】
神村イツキは、記憶喪失の少女『雪城鈴』に付きまとわれている。現代の常識が殆ど吹っ飛んでしまっている彼女と、それに振り回される彼の日常を描く。

これが二人の日常

「あっ」
夕方、コンビニの店内に不吉な音が響く。
開封された、いや開封されてしまった袋からは枯葉のようなものが何枚も舞い落ちている。

ポテトチップスだ。

「うわああ！　何やってんだよお！」
ほんの一瞬、神村イツキが彼女から目を離した瞬間の惨事。
彼は狼狽してしまう。当然だ。
「開いちゃった……」
自分でも良くないことをしたという自覚があるのだろうか、雪城鈴は自らの手で開封してしまったソレを両手に持ち、申し訳なさそうにイツキに視線を送る。
「ああ、もう！　貸して！」
急いで走り寄り、少し乱暴気味に彼女の両手からポテトチップスの袋を引っぺがす。
「何にも触れずに待ってて」と言うと、彼はレジの方へ駆けてゆく。
レジにいるアルバイトであろう店員に頭を下げて平謝りをする彼の姿を見ながら、彼女は頭を掻く。いけないことをしたという自覚はあるのだ。ただ、その判断基準は彼女にとってはとても曖昧なもの。

どれが正しくてどれが正しくないのか。
何が普通であって何が普通ではないのか。

彼女にとって全ては未知の世界。

「ごめんね？　イツキ」
帰り道、イツキの顔を覗き込む鈴。真珠のように黒く長い髪の毛と大きな目が特徴的だ。
「……ああ、いいよ」
少し疲れた様子で応える。
「ああいう所では開けちゃダメなんだね。次からは気をつける」
自分の胸のあたりで両手を結びながら、心に刻むように唱える。
「……そもそも、なんでポテチの袋なんか持ってたんだ？」
「何かなって思って」
「そんで、確かめてたら開いた、と」
「そう」
「好奇心旺盛か、お前は」
「だ、だからぁ！　もうしないよ！　触らないもん！」
反省（弁解？）する彼女の姿はもう何度見ただろうか。
「いや、注意するの忘れてたし、俺も悪かった」
「はぁ。この前行ったお店では、開けるどころか食べることだってできたのに、不思議だね……。判断が難しくって参っちゃうよ」
「あれは試食っていって、食べ物の宣伝だ」
「ふーん……。じゃあもっといっぱい食べとけば良かった」
「やめろよなぁ、みっともない」
イツキは年頃の女の子がスーパーの試食コーナーにがっついている姿を想像しながら述べる。
「でも、良かった！」
「？　何が？」
鈴の顔が少しだけほころぶ。
「だって、欲しかったんでしょ？　ソレ。なら丁度良かったじゃん！」
イツキの持つコンビニの手提げビニール袋を指して話す。中には先ほど開封済みのポテトチップスが入っている。

「欲しかったんじゃないよ！　買い取らされたの！　商品にならないから！」
「えぇ！　そうなの！？」
「そうなんですよ、鈴さん」
本当に驚いた表情をしている鈴に彼も怒る気が無くなってしまう。その代わりに深い嘆息が漏れる。
家に着く頃には、彼はすっかり疲れきってしまっていた。近くのコンビニ行っただけだというのに、この疲れ様は何なのだと言いたくなる。それに対して鈴はまだまだ元気だ。いつものようにテレビの前にちょこんと座って、チャンネルをいじくり回している。
「明日だよね？」
天気予報が明日は晴れだの曇だのと言っている。その前に座っている鈴はテレビから視線を外してイツキに移行しつつ話しかける。
「学校か？　そうだな」
「イツキと同じ学校で、しかも同じクラス！　改めて、宜しくね！」
満面の笑みだ。
彼女、雪城鈴は明日から『おそらく』高校2年生になる転校生。彼女が転校して在籍する予定のクラスは神村イツキと同じ。そして学校は明日の4月1日から始まる。
「あぁ」
（宜しくって言われてもなぁ……）
晩ご飯の支度をしながら彼女が話に耳を傾ける。
明日が4月1日ということは、今日は3月31日。彼と彼女が接点を持つのは明日からのはずである。
神村イツキが在校生で、雪城鈴が転校生。
そういう関係になるはずだ。
だが、彼女は2週間も前から神村イツキを見つけて付きまとっている。そう表現してしまうと鈴には不本意かもしれないが、現にそれ以外にこの状態を表す言葉が見当たらないので仕方がない。
「……鈴。本当に鈴は転校生で、明日俺と同じクラスになるんだな

？」
「そうだよ？」
「じゃあ、丁度いい。鈴、俺から離れるんじゃないぞ」
「そーんなこと言われなくてもわかってるよぉ」
鈴が嬉しそうにイツキに飛びついてくる。だがイツキは「しまった！」という表情をしてそれを回避して跳ね除ける。
「そういう意味じゃなくて！」
「じゃあ、どういう意味で？」
「お前、記憶ないんだろ？」
「ない。ほとんど覚えてない」
「だから。また変なこと為出かすかもしれないだろ？」
エプロン姿で人参を切りながら、居間に追い返した鈴に話す。彼は県外の出身者なので、一人暮らしだ。主に両親からの仕送りで生活している彼は、自分の生活をすることで精一杯の毎日を送っていた。
そこにヒョコッと現れたのがこの雪城鈴。
「しないよぉ」
まさかぁ、と言うような表情で彼の方を見る鈴。
「いや、する。初めて会った日、ずーっと俺を尾行して家までついてきたお前なら、十分にありえる。現に今日もひとつやらかしたしな」
「欲しくもない商品を買ったこと？」
「違う！　お前がポテチを店内でぶっ放したこと！」
この調子で明日から大丈夫なのだろうかと不安になる。いや不安なんてものでは到底済まない。この不安という表現は、『ヤバい』という言葉に置き換えられる。それも、テスト前に勉強してないからヤバい、とか、今日体育の授業があるのに体操着を忘れたからヤバい、とか、そういう類のものではない。それはもう、電車が到着する瞬間にホームに転落したからヤバい、とか、ハイキングしていたら滑落した上に目の前に５匹もクマがいるからヤバい、とか、そ

んな感じのヤバさだ。彼が伝えたいのは、とにかく安穏としていられる状況ではないということ。
「だからぁっ、ソレは反省してるよぉ……」
肩をすくめる鈴。
鈴にはどこか保護欲を煽る雰囲気がある。小さな背丈に、幼い女の子を思わせる顔立ち。肩幅も狭い。大きな人形を抱えさせたら、ほとんど隠れてしまいそうなくらいだ。その姿を見るたびに彼は「うっ……」口をつぐんでしまう。これ以上彼女を責めることにどこか罪悪感を覚えてしまうのだ。
そして記憶喪失故にこの現代社会における断片的な知識しか持ち合わせていない。ましてや常識なんてあったものでもない。
一般常識がないことも、記憶喪失であることも、それはもうこの社会で生きて行く上では必須事項であり何一つ欠けてはいけないものだ。だがイツキにはそれをも上回る最大の関心ごと兼疑問点があった。
それが――「もう一度聞くけど――」
「――なんでお前は俺から離れないんだ？」
大きく息を吸った後に投げかけるこの質問。もう何度しただろうか。
だが、鈴はその問に決まって
「よくわかんない。でも、イツキから離れちゃいけないの」
と答えるだけ。もちろん今回も例外ではなくお決まりのコレで返される。まるでテニスの壁打ち練習かのようだ。彼には鈴の真意が掴めなかった。当の本人もその言葉の意味を深く察していないようであるから、答えのいとぐちさえ見いだせない。
今日の晩御飯は焼き魚と野菜炒めに白米。それらを盆に乗せて鈴の居る居間に運ぶ。イツキは作りたての料理を居間のちゃぶ台にひ

とつずつ丁寧に置く。
「わぁ」と目を輝かせる鈴。さっきまで夢中だったテレビはそっちのけだ。
「ねぇ、もう食べてもいい？」
「ちょっと待ちなさい。手で食う気かお前は」
「手で食べてるとこもあるんだよ？」
「確かにあるケドな、それは外国の話だ。ていうか、なんでそんなこと知ってるんだ？」
「テレビで言ってた」
イツキは会話を続けながら二人分の箸とコップを持ってくる。続けて冷蔵庫からお茶の入ったピッチャーをちゃぶ台まで運び、やっとご飯の時間になった。

明日はとうとう入学式。

木炭と自己紹介と自動ドア

雀のさえずりが聞こえる。
日差しが嫌というほど彼を照りつける。
「朝だよー！！」
鈴が思い切りカーテンをオープンしたのだ。
相変わらず朝っぱらから元気なヤツだなぁ、と彼は眠い目をこすりながら肌蹴た布団を再びかぶる。
「あ！」
彼女が近付いてくる足音。
彼の周囲の世界は再び強制的に明るくなった。急いで布団を探すも鈴に後方へ吹っ飛ばされているので、偶然が味方してくれる以外に手探りでは探し当てる術がない。
「あーさー！！」
また元気な声が聞こえる。
「うるさいー……」
イツキは小さな声で反撃に出る。
「朝だよイツキ！　朝！　あーさー！」
「わかった、起きる。起きるから大きな声を出すなって。近所迷惑だろぉ？」
眠そうな声だ。
「アーサー、アーサーって。なんかの王かお前は……」と、ふと浮かんだ下らない冗談を鈴にふっかけてみるも、目をこすっていた手をどけると彼女は彼の前にはもういなかった。
「何―？　呼んだー？」
台所の方から鈴の声。
「いや、何にも……」
少し気恥ずかしそうに制服へと着替えを始めた。朝から騒ぎ立てていた鈴はもう既に着替え終わっている。彼女に遅れること数分、

制服に着替え終わったイツキは眠たそうなふらふらとした足取りで台所へと向かう。
「はい、ご飯！」
急に彼の目の前に、鈴が『ご飯』と称するものがズイと差し出される。
「……木炭？」
「違うよ、パンだよ」
「パンかよ！　炭化してる！」
「うーん、どうも上手く焼けなかったみたいでねー」
『いやー、参った』とでも言いたそうな表情。台所のテーブルの上はパン粉だらけ。袋から取り出す作業に手間取ったと見える。
「でもさ、こういうのって『見た目じゃない』ってよく言うんでしょ？」
「誰が言って――」
「テレビ」
彼女の知識は大体がテレビかイツキ。彼が与えていない知識は全てテレビであるから、イツキが『誰から聞いた』と鈴に質問してもその答えはテレビに決まっているのだ。彼もそのことは知っているのだが、ついつい反射的に聞いてしまう。
「だからさ、見た目じゃないんだって！　食べもせずによく言うよー」
「いやいや、今回ばかりは見た目が重要だろ！　見るからに食い物じゃない色してるし！」
「えー、せっかく作ったのにぃ」
「『作った』って、焼いただけだろ？」
目の前に差し出した皿をテーブルに置きながら、鈴は少し残念そうな表情をする。
「まさか、お前もその消し炭を食ったのか？」
「私は上手く焼けた方を食べた」
「おい！　失敗作の自覚あるんじゃねえか！　食わそうとするなよ

な、そんなモン……」
　イツキは文句を垂らしながら新しいパンを袋の中から取り出し、オーブントースターに放り込む。
「パンは1分くらいで十分。覚えといて」
　と言いながらつまみをひねる。
「うん、私もさっきそれを知った。１０分焼いたら真っ黒になったんだ」
「そ、そうか……」
　１０分も焼かれるなんて、何と不運なパンだろうか。冷凍されているパンでも１０分間も焼いたらコレと同じ様な暗黒の姿を披露するだろう。しかもよくよく改めて見てみると木炭と言うより、完全に炭だ。このまま『炭』としてパッケージされて商品棚に陳列されていても気付かないほどに真っ黒。それにチラと視線を送りつつさっさと食事を済ませたイツキは、もう既に玄関で待っていた鈴と一緒に学校へ出かけた。ガラス越しではない朝の日差しがまた一段と眩しい。

◇　◇　◇

――何度車に轢かれそうになっただろうか。
　教室に到着して自分の席に座る彼は、始業式もまだ始まっていないのにもうぐったりだ。
（道路で鈴が走りまわるから……）
　鈴は車の危険性を把握している。『車には注意しないといけない』ということもイツキから幾度と無く諭されてきたので、少なくともその分別はあるはずだ。だが、圧倒的な経験不足。社会的な経験がまったくもって足りていない。彼女が記憶を無くす前はあっただろう『常識』が、今は欠片ほどしか残っていない。毎日が学習だ。例

えば車が曲がり角や死角から飛び出してくるかもしれないとか、急に止まることができないとか、彼女も頭では分かっているはずだ。見ればわかることばかりだし、理解するには容易いこと。しかしその危険性を、身を持って知っているわけではない。だからこその彼女の無鉄砲且つ大胆な行動が、イツキには心配で心配で仕方なかった。

（あいつ、今頃一人で大丈夫だろうな……？　変なことしてないだろうな……？）

イツキの脳裏に職員室前で別れた鈴の顔がよぎる。確か満面の笑みで、別れ際にこっちに向かって手を振っていた。彼女が何か変な行動でも起こすのではないかと、イツキの内心はそれはもうハラハラものであったのだが、そんなことを微塵も察していなかったような無邪気なあの表情がまた彼の不安を倍増させる。

始業式は滞り無く執り行われた。校長先生の長ったらしい話も、よくわからない賞状の授与も、来賓の紹介も、彼らにはどうでもいい話。全く頭になんて入っていない。特に今の神村イツキには、そんな話の一片も入る余地など残されていなかった。なぜならこの始業式が終われば次は教室でのホームルーム。普段なら授業ではない、半分歓談の時間となるこの授業。生徒たちにとっては何のプレッシャーもかからない至福の時となるはずだ。それが今回は彼の最大の試練。おそらくこのホームルームの時間に――

「――じゃあ転校生の紹介の時間といこうか！」

教室が一気に沸き立つ。先生が「転校生は女子」だと告げると、より一層大きな歓声に包まれる。

「イツキ、お前ももっと喜べよ！　女子だってよ！」

「あ、あぁ……」

沸き立つ男子生徒にも、力のない笑顔で返す。これからの苦労を考えると両肩に重荷を乗せられるような思いだ。

「それじゃ、雪城。入ってきて」

先生が扉の向こうに立つ転校生、雪城鈴の入室を促す。
「マジかよ……」
小さな声でイツキがつぶやいた。彼女の言っていたことが本当だったからだ。根拠もなく言い張る鈴に、完全には信じきれていない気持ちがどこかにあった彼の思いは、また確信へと一歩駒を進める。彼がそんな思索を巡らせている間に、教室がざわざわしだした。教室の扉は引き戸形式の一般的なもの。その扉の磨りガラスの向こう側に影が見える。雪城鈴は確かにその向こうにいる。だが扉は開かない。
「……。……。……あれ？」
鈴は教室の扉の前でつっ立ったまま。何か不思議なものを見るかのように扉を眺めているだけ。
「？　雪城？」
訝し気な表情をする先生と生徒達。
（何してんだよ、早く入って来いって！）
念波でも出るのではないかというほどに強いメッセージを『鈴に届け！』と祈るも、そんなことを知る由もない当の本人は脳内ハテナマークで呆然と立っているだけ。しびれを切らした先生が扉をガラっと開けると、鈴は「うわっ！」と小さく声を出して驚いた。
「何をしているんだ？　早く入りなさい」
「あは、はい。自動ドアじゃないんですね」
鈴はどうやらコンビニなどの自動ドアと勘違いしていたらしい。思えば彼女はイツキとコンビニくらいしか行動を共にしたことがない。記憶のない彼女が『引き戸形式の扉は全部自動だ』と勘違いしていても不思議ではない……？
これはイツキには強烈な先制パンチであった。
（ぐっ……！　初端からこんなインパクトの強いことやりやがってぇ……！）
先生はこの鈴の返答に失笑。彼女なりの、何かの冗談だと捉えたのだろうか。

鈴は教卓の前に移動する。そして白のチョークを手に取り、黒板に大きく自分の名前を書いた。
「札幌雪祭りの『雪』にノイシュヴァンシュタイン城の『城』、鈴鹿サーキットフラワーガーデンホテルの『鈴』で『ゆきしろすず』と言います。よろしくお願いします」
ぽかんとする先生。
（自己紹介、斬新過ぎるだろ！　ただでさえ言動が目立つのに、これ以上注目をあびるような真似やめてくれよ……）
イツキの精神は初端から大きく削られる。
だが生徒たちの反応は上々。不思議な女の子だなと思われた程度に済んだようだ。さすが雪城鈴の美少女補正。普通ならば『変人だ』『近寄ったら色々な意味でケガするかも……』と思われるところを逆に自らのアドバンテージに変えてしまう。たとえ本人にその気が無くとも『これもこの子の魅力なんだ！』と思わせてしまう。逆の立場なら世の中の不条理を痛感するところだ。実際は彼らの第一印象のままの人間なのであるが……。だが、まさか彼女が記憶喪失者で、しかも神村イツキと一緒に住んでいるなどということは、一瞬たりとも、微塵も思いもしないだろう。もちろんこれは内緒だ。広がれば騒ぎになる。記憶喪失の人なんてこの世は広しといえどもそうそう居てたまるものではない。バレると騒ぎになるのは容易に想像できる。だからイツキも鈴に事前に口止めをしたのだ。鈴はそれに頷いてくれたものの、それだけではこの不安感は解消するものではない。

◇　◇　◇

「いや、初めて知ったよ」
ホームルームも終わり帰路につくイツキと鈴。
「何が？」
「教室のドアって、勝手に開かないんだね」

彼女はイツキと出会ってからの記憶しかない。それ以前の記憶は断片的にしか残っていない。更にイツキが鈴を連れて出かけた場所といえばコンビニくらい。コンビニのドアは勝手に開く。御存知の通り自動ドアだ。鈴はそれしか見たことがない。やはり鈴の中では『扉＝勝手に開く』という図式が出来上がってしまっていたのだ。

「あのなぁ、俺の家のドアは勝手に開くか？」

「開かない」

「それと同じ。ドアってのは普通は人が開けないと開かないんだよ。コンビニとか、そういう店とかではサービスで自動なだけで普通は自動ドアじゃないんだ。それに、家のドアが自動ドアだったら防犯上宜しくないだろ？」

「それは大丈夫だよ！」

彼女のつぶらな眼差しがイツキに向けられる。

「？　なんでよ？」

「イツキは強いから！　もし悪い人が入ってきても、やっつけちゃうんだから！」

鈴は笑顔でそう言い切った。

彼にはまさに青天の霹靂だった。

人生で一度も言われたことのない言葉、『強い』。

彼は全く強くない。ケンカだってすぐに負ける。いや、負ける前に降参する。スポーツは人並み。何か突出してできるというわけでもない。

「はぁ、別に強くないぞ？　おれ」

鈴の確証のない適当な妄言だと彼は判断する。

「強いよ！」

だがそれは鈴の強い語調で否定された。

「え？」

「強いんだよ、イツキは！　私、何にも覚えてないけど、イツキが強いことは間違いない！」

いつもより強く主張を続ける鈴。ついつい気圧されてしまう。

「そんな根拠もなく強い強いって言われてもなぁ……。どこがどう強いんだ？」
「そうだね、銃を持った強盗に素手で応戦するくらい強い」
場面を想像するまでもなく、敗退濃厚なシチュエーションが容易に想起される。
「強すぎるだろ！　何かの達人かよ！　ていうかその『強い』の意味、違うくねえか！？」
信憑性など元々無い鈴がこのようなトンデモ例え話を披露しても説得性は皆無。
なので
「……ああ、もうわかったよ。何がどう強いのかよく分かんねぇけど、鈴の期待する程度には強くなるように頑張るよ」
と、イツキは華麗に流すことにした。
このまるっきり信じていないイツキの口ぶりに、鈴は口を尖らせる。
「……信じてないでしょ」
「いやいや、信じてますよー」
明らかな棒読みに、鈴はプイとそっぽを向く。

雪城鈴が突然突拍子もないことを言うのは日常茶飯事。
イツキもそろそろ慣れてくる頃だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0603x/

だから彼女はついてくる！

2011年9月28日03時25分発行